

スプレー缶の危険性！！

Part. 2

全国の火災事例

【事例1】居室内で冷却スプレーを使用した後、タバコを吸おうとライターを点火したところ、滞留していたガスに引火し、火傷を負った。

【事例2】ガス給湯器を使用中、近くでスプレー缶のガス抜きをしていたところ、火災になった。

【事例3】居室天井に設置されている、照明器具内のゴキブリを退治しようと、照明器具カバーの隙間から殺虫剤を噴射したところ、電気火花により出火した。

【事例4】シュレッダーが紙詰まり状態だったので、潤滑スプレーを噴射したら爆発音とともに火が出て、火傷を負った。

【事例5】居室でヒーターを使用中、そばに置いていたヘアスプレーの缶が温められ、缶の内圧が上昇し破裂、火災になった。

【事例6】捨てられたスプレー缶が、ゴミ収集車の荷箱内で、圧縮された際に残存していたガスが噴出し、圧縮時等に発生した火花が引火し火災になった。



事例から

多くの場合、スプレー缶に書かれている「使用上の注意」を守れば防げるものです。また、事例3や事例4、事例6のように、電気等の火花でも火源になることがわかります。

■ スプレー缶の注意事項(まとめ)

【保管時】缶には可燃性の高圧ガスが充填されており、温度が高くなると内圧が高まり、破裂危険がある。

- 自動車内や直射日光の当たる場所、暖房器具などの近くに置かない。
- スチール缶の場合、湿気が多い場所で保管していると缶が錆びて、内容物が漏れるおそれがある。

【使用時】使用中または直後に火気を近づけると、可燃性ガスに引火する。

- 使用中または直後は引火するおそれがあるので、火気を近づけない。
- 車内など風通しの悪い空間で大量に使用しない。
- 電気火花なども火源となり得るので、注意が必要。



【廃棄時】業界団体では、スプレー缶内の残存ガスを完全に出し切れるよう、平成18年度の製造分より、商品に付属するガス抜きキャップ(中身排出機構)の装着を実施している。缶の廃棄方法は自治体ごとに決まっている。

- ガス抜きをする際は、風通しが良い火気のない屋外などの場所で行う。
- 年月が経ったものや、スプレー缶が異常に膨らんでいるなど、廃棄方法に不安がある場合には、メーカー等に相談する。

